

蜘蛛流大工棟梁横田氏の虹梁絵様について

— 横田家大工文書の研究（4） —

Consideration on the Design Style of Beams made
by the Yokota Family, or the Master Builders of the Kumo School

白井 裕泰*

Hiroyasu Shirai

1. はじめに

横田氏は、東北地方において蜘蛛流と呼ばれる大工集団を形成し、江戸後期から明治期にかけて活発な建築生産活動を行った大工棟梁である。横田家には全体で859点に及ぶ大工文書が残されているが、この文書は、東北地方における地方大工の建築生産活動の実態を明らかにする上で、極めて貴重な資料であるといえよう。

本論文は、横田家によって残された大工文書のうち虹梁絵様図を取り上げて、蜘蛛流大工棟梁横田氏が建築した作品に見られる絵様の変遷とその背景を体系的に把握することを目的としている。またその結果として、どの建築作品に用いられたのか不明な絵様図を、特定化することができることを期待している。

ところで近世における大工棟梁の理想像は、幕府大棟梁平内家に伝承した大工技術書『匠明』（平内政信、慶長13年）の奥書に以下のように記されている¹⁾。

この一部は五意達者にして昼夜怠らず 地割と又は古人の作りおかるる所の好悪を見合せ分別仕る可し たとえ残すところ有之と雖も各是に准知すべきか 特に只浅々と他見すべからず 仍ち子孫に伝えて秘すべく候（平内吉政による奥書、慶長15年）

すなわち大工棟梁の理想とは、昼夜努力を惜しまず、五意に通達し、古人が建築した作品の好悪を見抜くことのできる工匠であったといえよう。ここでいう五意とは(1)式尺の墨曲(2)算合(3)手仕事(4)絵様(5)彫物であり、したがって大工棟梁の能力として木割・規矩、積算、加工、装飾意匠、彫刻が達者であることが求められている。

絵様（装飾意匠）のデザイン力は大工棟梁にとって必要欠くべからざる資質であり、大工集団を統率する棟梁としてのアイデンティティを表出するための重要な媒体のひとつであった。したがって絵様は本来的に変化するものであり、それゆえ遺構の絵様を分析することで、ある程度は建築年代が推定できるのである。

また江戸時代における社寺の建築生産は、江戸幕府が政策的に庶民を支配する機構として檀家制度を整備しようとしたために、江戸をはじめとした全国に巨大市場が現出し、活況を呈することになり、その中で大工集団の組織化と競争が生まれた。その生存競争に生き残るためには、五意達者の中でも特に絵様・彫物の重要性が次第に増していったと考えられる。すなわち大工棟梁が市場の中で生き残るためには、装飾である彫物に対する意匠努力を欠くことができなかったといえよう。建築に対する評価は本来

* 住居学科

的には規模の大きさや建築全体の比例・構成の好悪によって決められるべきものであったが、絵様・彫物が建築の好悪を決める重要な要素となると、絵様・彫物の進化は格段の早さで進むことになる。

横田氏の絵様が独自のものであったのか、あるいは絵様の先進地からその情報を摂取することによってその時代の流れに沿ったものであったのかは、まずは横田氏の絵様の変遷の実態を明らかにしなければならない。

2. 虹梁絵様の名称

横田氏の絵様を分析するにあたって、ここでは主に虹梁の絵様について取り扱うことにするが、虹梁絵様の名称がどうしても必要になってくる。江戸時代の代表的な大工雛形書の中に絵様が扱われているものがあるが、須原屋茂兵衛蔵版の大工雛形書として以下のようなものがある。

- ①「大匠雛形 彫物絵本」(鈴木重春著 正徳4年)
- ②「匠家絵様集」(官匠廣丹 父著)
- ③「新撰雛形 絵様」(木暮甚七著 宝暦10年)
- ④「大和絵様集」(立川小兵衛著 宝暦13年)
- ⑤「彫工雛形」(二柳先生著 文政10年)
- ⑥「当世いろは絵様集」(奴長兵衛著 天保5年)

このうち「大和絵様集」によると、虹梁絵様には次のような名称が与えられている。

- 虹梁木瓜渦放若葉 (こうりょうもっこううづはなれわかば) (図1)
- 渦若葉 (うづわかば) (図2)
- 渦回若葉 (うづかへりわかば) (図3)
- 木瓜渦蔓若葉 (もっこううづつるわかば) (図4)
- 木瓜渦付キワかは (もっこううづつきわかば) (図5)
- 白渦若葉 (しろうづわかば) (図6)
- 巻上り蔓若葉 (まきあがりつるわかば) (図7)

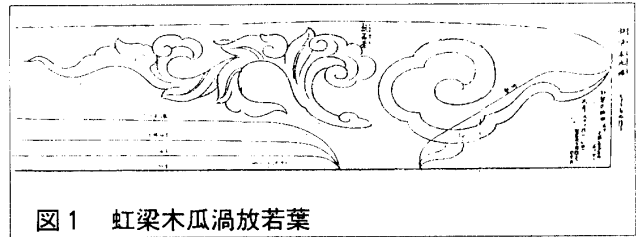


図1 虹梁木瓜渦放若葉

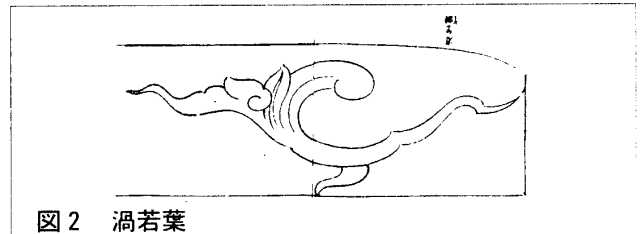


図2 渦若葉

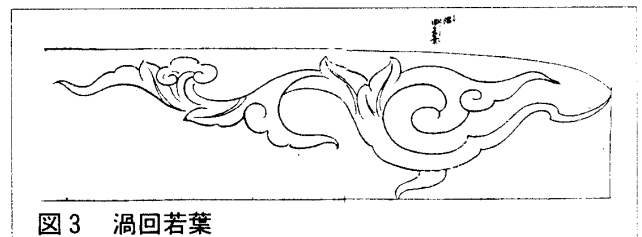


図3 渦回若葉

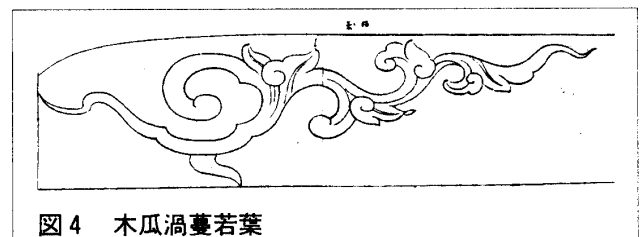


図4 木瓜渦蔓若葉



図5 木瓜渦付キワ若葉

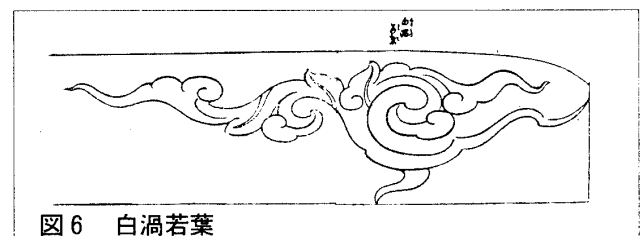


図6 白渦若葉



図7 巻上り蔓若葉

これを大きく分類すると、次の3つになる。

- イ. 渦放若葉：渦と若葉が放れているもの
- ロ. 渦付若葉：渦に若葉がついているもの
- ハ. 渦付蔓若葉：渦が若葉化し、それに蔓状の若葉がついているもの

さらに細かく見ていくと、渦の形態には木瓜が付くものと付かないもの、また渦の巻き方の上から下がって巻き上がるものと下から上がって巻き上がるものがある。若葉の形態には、単

純な若葉と蔓状に伸びた蔓若葉がある。

以上を整理すると虹梁の絵様は次のような項目によって分類される。

- イ. 渦の巻き方：(下り巻上げ, 上り巻上げ)
- ロ. 渦の形態：(渦, 木瓜渦)
- ハ. 若葉と渦の関係：(放れ若葉, 付き若葉)
- ニ. 若葉の形態：(若葉, 蔓若葉)

これらの要素を組み合わせて絵様のパターンが決定されているといえよう。

表1 横田氏による建築作品の遺構リスト

No.	名称	建築年代	所在地	根拠	初二代 三代 四代 五代 六代
1	菅谷神社本殿	寛保2(1742)年	滝根町菅谷	棟札	
2	貝谷観音堂	延享4(1747)年	滝根町広瀬	推定	
3	牧牛山普賢寺山門	寛延2(1749)年	小野町小野新町	普賢寺文書	
4	広沢山宝蔵寺客殿	天明2(1782)年	滝根町広瀬	墨書	
5	菅船神社本殿	文化14(1817)年	平田村上蓬田	棟札	
6	蛭沢稲荷神社本殿	文政2(1819)年	相馬郡小高町	棟札	
7	秋田山龍稔院本堂	天保2(1831)年	三春町荒町	墨書	
8	正学院浮金観音堂	天保5(1834)年	小野町浮金	横田家文書	
9	大徳山地蔵院本堂	天保11(1840)年	船引町船引	棟札	
10	舟生山昌源寺本堂	嘉永2(1849)年	梁川町舟生	横田家文書	
11	飯豊愛宕神社拜殿	嘉永4(1851)年	小野町飯豊	横田家文書	
12	子鎌倉神社本殿	嘉永4(1851)年	いわき市平	横田家文書	
13	東堂山満福寺鐘楼	万延2(1861)年	小野町小戸神	横田家文書	
14	駒形神社本殿	明治6(1873)年	平田村駒形	棟札	
15	鹿島神社社殿	明治15(1882)年	郡山市西田町	神社縁起	
16	五斗蒔延命地蔵堂	明治22(1889)年	大越町上大越	横田家文書	
17	飯嶋山剛叟寺本堂	明治22(1889)年	滝根町神俣	郷土の歩み	
18	字佐八幡神社拜殿	明治23(1890)年	滝根町広瀬	棟札	
19	熊倉神社社殿	明治25(1892)年	いわき市川前町	横田家文書	
20	古峰神社拜殿	明治31(1898)年	滝根町広瀬	推定	
21	牧牛山普賢寺本堂	明治33(1900)年	小野町小野新町	横田家文書	
22	郎山神社本殿	明治37(1904)年	滝根町菅谷	棟札	

3. 横田氏の建築作品にみる絵様

蜘蛛流大工棟梁横田氏の建築作品については、福島県滝根町の町史編纂事業の一環として、横田氏が関与したと思われる社寺建築の調査が昭和60年度より平成4年度まで継続して行われ、その成果が『滝根町建物調査報告1～7』²⁾にまとめられている。

ここでは横田氏の建築作品のうち現存する遺構を対象として、その絵様の分析を試みることにする。そこで遺構のリストを建築年代順に整理すると表1のようになる。

ところで横田棟梁の建築活動を大きく分けると、第1期：1742～1818、第2期：1819～1868、第3期：1869～1927の3期に分けることができる。第1期は三春藩およびその周辺において建築活動が行われ、地方棟梁としての土台を固めた時代であった。第2期は蜘蛛流番匠横田左衛門の全盛期であり、この地方のかなり広い範囲において建築活動をした時代であった。第3期は建築活動が滝根周辺に限定され、かつ仕事量が激減し、新興勢力によって大工棟梁としての社会的地位を追われ、蜘蛛流棟梁横田左衛門が終焉した時代であった³⁾。

横田棟梁の建築作品の遺構における絵様を通観すると大きく3期に分けることができるように思われる。第1期は渦放若葉文型、第2期は渦付若葉文型および渦付蔓若葉文型、第3期は単純渦若葉文型および複雑唐草文型である。そこで各期の絵様について詳細に検討してみることしよう。

1) 第1期：渦放若葉文型

① 菅谷神社本殿（寛保2・1742年）

向拝水引虹梁／下り巻上げ木瓜渦・放蔓若葉文
(図8)

渦は袖切り部分に2カ所の屈曲をもち、上から下って巻き上がり、2カ所で屈曲した木瓜形となっている。蔓若葉は渦から放れ、葉元に2葉の枝葉が付き、先が蔓状に伸びた若葉となっている。



図8 菅谷神社本殿向拝水引虹梁

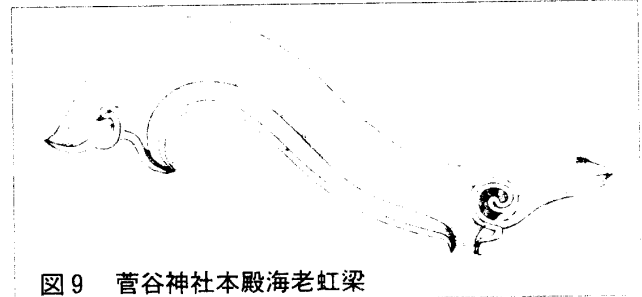


図9 菅谷神社本殿海老虹梁



図10 貝谷観音堂向拝水引虹梁



図11 貝谷観音堂内外陣境虹梁



図12 普賢寺山門正面虹梁



図13 宝蔵寺客殿正面中央虹梁

海老虹梁／向拝柱側・身舎柱側；下り巻上げ渦文 (図9)

②貝谷観音堂 (延享4・1747年)

向拝水引虹梁／下り巻上げ木瓜渦・放蔓若葉文 (図10)

渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、上から下って巻き上がり、3カ所で屈曲した木瓜形となっている。蔓若葉は渦から放れ、葉元に2葉の枝葉が付き、先が蔓状に伸びた若葉となっている。菅谷神社本殿向拝水引虹梁の絵様に類似している。

内外陣境虹梁／下り巻上げ渦・放若葉文 (図11)

渦は袖切り部分に屈曲がなく、上から下って巻き上がっている。若葉は渦から放れ、葉元に1葉の枝葉が付いている。

③普賢寺山門 (寛延2・1749年)

正面虹梁／下り巻上げ渦・放若葉文 (図12)

渦は袖切り部分に屈曲がなく、上から下って巻き上がっている。若葉は渦から放れ、葉元に1葉の枝葉が付いている。貝谷観音堂内外陣境虹梁の絵様に類似している。

④宝蔵寺客殿 (天明2・1782年)

正面中央虹梁／上り巻上げ渦・放流水波・放若葉文 (図13)

渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、下から巻上がっている。渦から放れて流水に3つの波頭をもつ波文が付き、さらに放れて先が2葉に分かれた若葉文が付いている。

来迎柱間虹梁／下り巻上げ木瓜渦・放若葉文 (図14)

⑤菅船神社本殿 (文化14・1817年)

向拝水引虹梁／下り巻上げ木瓜渦・放若葉文 (図15)

渦は袖切り部分に3カ所の屈曲をもち、上から下って巻き上がり、1カ所で屈曲した木瓜形となっている。若葉は渦から放れ、葉元に1葉の枝葉が付いている。宝蔵寺客殿来迎柱間虹梁の絵様に類似している。

妻虹梁／下り巻上げ渦と上り巻上げ木瓜渦・放若葉文 (図16)

渦は袖切り部分に2カ所の屈曲をもった上

から下って巻き上がる渦と袖切り部分に1カ所の屈曲をもった下から上って巻き上がる木瓜形(1カ所の屈曲)渦が接している。若葉は木瓜渦に放れて付き、葉元から2葉に分かれている。

2) 第2期：渦付若葉文型および渦付蔓若葉文型

⑥蛇沢稻荷神社本殿 (文政2・1819年建立、天保元・1830年修理)

向拝水引虹梁／下り巻上げ渦文 (図17)

渦は袖切り部分に2カ所の屈曲をもち、上から下って巻き上がっている。

海老虹梁／下り巻上げ渦文 (向拝柱側) 上り巻上げ渦文 (身舎柱側) (図18)

向拝柱側の渦は袖切り部分に2カ所の屈曲をもち、上から下って巻き上げている。身舎柱側の渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、下から上って巻き上げている。

妻虹梁／下り巻上げ蔓若葉文 (図19)

渦と若葉が一体となり蔓若葉となっている。横田棟梁の作品の中で、蔓若葉が虹梁に付く絵様として採用されている最初のものである。

⑦龍穂院本堂 (天保2・1831年)

玄関虹梁／下り巻上げ流水波頭・付流水波頭文 (図20)

渦の部分は、2カ所の屈曲をもち、上から下って巻き上げ、先が2つに分かれていて、蔓若葉部分は、渦と分かれるところに3つの波頭が付き、先が大きく3つに分かれている。1つ目は菊花、2つ目は2つの波頭、3つ目は菊花がそれぞれの先端に付いている。全体が蔓状に虹梁中央まで伸び、豪華な絵様となっている。

玄関繫虹梁／上り巻上げ渦文 (図21)

渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、下から上って巻き上げている。

⑧正学院浮金観音堂 (天保5・1834年)

向拝水引虹梁 (表)／上り巻上げ渦・付若葉文 (図22)

渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、下

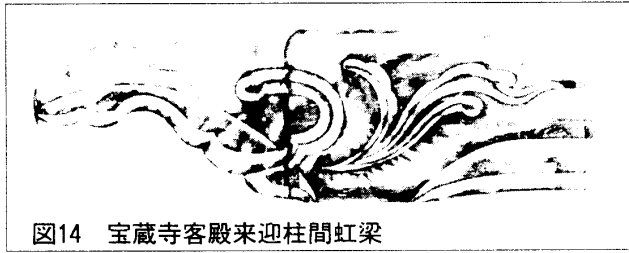


图14 宝蔵寺客殿来迎柱間虹梁



图15 菅船神社本殿水引虹梁



图16 菅船神社本殿妻虹梁

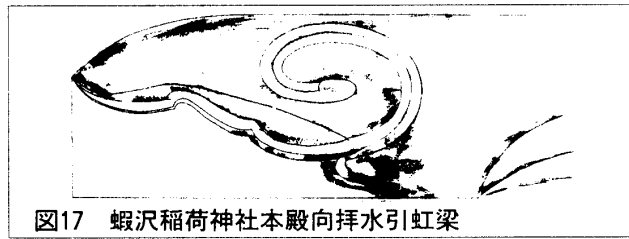


图17 蝦沢稻荷神社本殿向拝水引虹梁

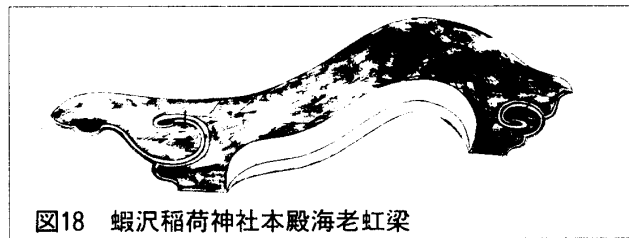


图18 蝦沢稻荷神社本殿海老虹梁

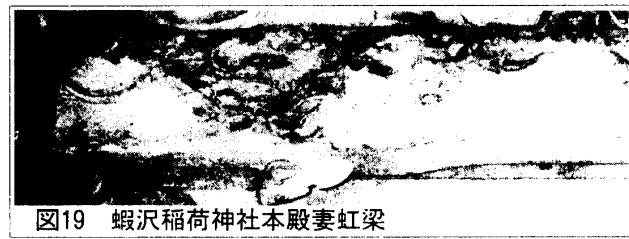


图19 蝦沢稻荷神社本殿妻虹梁

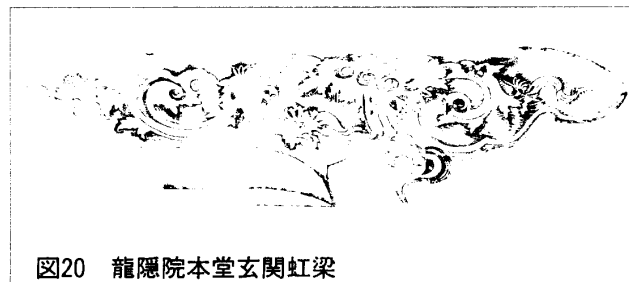


图20 龍隠院本堂玄関虹梁

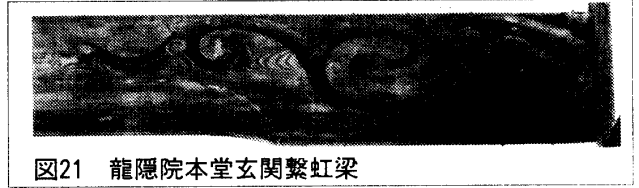


图21 龍隠院本堂玄関繫虹梁



图22 正学院浮金観音堂向拝水引虹梁 (表)



图23 正学院浮金観音堂向拝水引虹梁 (裏)



图24 正学院浮金観音堂正面中央間虹梁 (表)



图25 正学院浮金観音堂正面中央間虹梁 (裏)



图26 正学院浮金観音堂内外陣境中央間虹梁



图27 正学院浮金観音堂内外陣境脇間虹梁

から上って巻き上げ、渦の肩と先端に波が付いている。若葉は渦に取り付き、先は2つに分かれ、渦と分かれるところと若葉が2つに分かれるところに波が付いている。

向拝水引虹梁（裏）／上り巻き上げ渦・付渦若葉文（図23）

渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、下から上って巻き上げている。渦の腰から渦が分かれ、さらにその腰から若葉が分かれて取り付き、全体として蔓状になった若葉すなわち蔓若葉になっている。

正面中央間虹梁（表）／上り巻き上げ渦・付若葉菖蒲文（図24）

渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、下から上って巻き上げている。先が2つに分かれた若葉が渦から分かれて取り付き、渦と若葉の分かれ目と若葉が分かれるところに菖蒲の花が付いている。

正面中央間虹梁（裏）／上り巻き上げ渦・付若葉文（図25）

渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、その腰から若葉が一筋分かれて取り付くといった簡単な構成となっている。いわゆる渦若葉のもっとも基本的な例である。

内外陣境中央間虹梁／上り巻き上げ渦・付渦若葉文（図26）

渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、下から上って巻き上げ、渦の腰から渦が分かれ、さらにその腰から若葉が分かれて付いている。渦と渦または渦と若葉の分かれ目には小さな渦目が付いている。

内外陣境脇間虹梁／上り巻き上げ渦・付若葉文（図27）

渦は袖切り部分に屈曲がなく、下から上って巻き上がり、渦の腰から上に分かれて若葉が付いている。全体が若葉化した渦若葉となっている。

海老虹梁（向拝柱側）／上り巻き上げ渦・付若葉文（図28）

渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもって下から上って巻き上がり、その腰から若葉が分

かれて付いている。いわゆる渦若葉の基本例。海老虹梁（身舎柱側）／上り巻き上げ渦・付渦若葉文（図28）

渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもって下から上って巻き上がり、その腰から渦が分かれて付き、さらにその腰から上に分かれて若葉が取り付いている。いわゆる二次渦若葉となっている。

⑨地蔵院本堂（天保11・1840年）

正面中央間虹梁／上り巻き上げ若葉・付渦若葉・付若葉文（図29）

来迎柱間虹梁／上り巻き上げ渦・付若葉文（図30）

渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、下から上って巻き上げ、その腰から下に分かれて若葉が付いている。全体に若葉化した渦若葉となっている。

⑩昌源寺本堂（嘉永2・1849年）

大間仏間境虹梁／上り巻き上げ渦・付若葉文（図31）

渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、下から上って巻き上げ、その腰から下に分かれて若葉が付いている。全体に若葉化した渦若葉となっていて、地蔵院本堂来迎柱間虹梁の絵様に類似している。

⑪飯豊神社拜殿（嘉永4・1851年）

向拝水引虹梁（表）／下り巻き上げ渦・付若葉文（図32）

渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、上から下って巻き上げ、先の腰から1筋の渦が分かれて付いている。渦の途中の腰からは若葉が上に分かれて付いている。渦の袖切り部分、若葉との分かれ目、渦の先端に波頭が付いて賑やかな意匠となっている。

向拝水引虹梁（裏）／下り巻き上げ渦文（図33）

袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、上から下って巻き上げた単純な渦となっている。

身舎中央間虹梁／上り巻き上げ渦若葉・付蔓若葉文（図34）

内外陣境中央間虹梁／下り巻き下げ渦小若葉・付渦小若葉・付若葉文（図35）



図28 正学院浮金観音堂海老虹梁

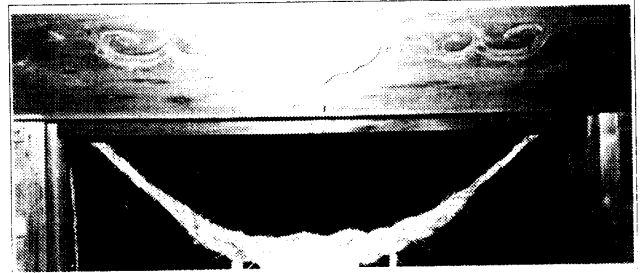


図34 飯豊神社拜殿身舎中央間虹梁

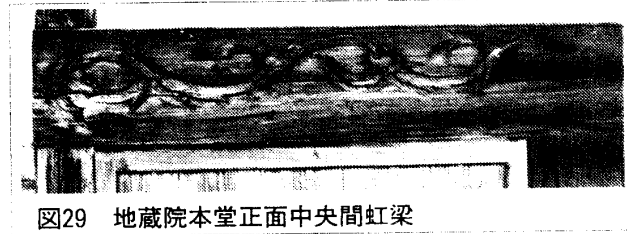


図29 地藏院本堂正面中央間虹梁



図35 飯豊神社拜殿内外陣境中央間虹梁



図30 地藏院本堂来迎柱間虹梁



図36 飯豊神社拜殿内外陣境脇間虹梁



図31 昌源寺本堂大間仏間境虹梁



図37 子楯倉神社旧拜殿繫虹梁 (表)



図32 飯豊神社拜殿向拝水引虹梁 (表)

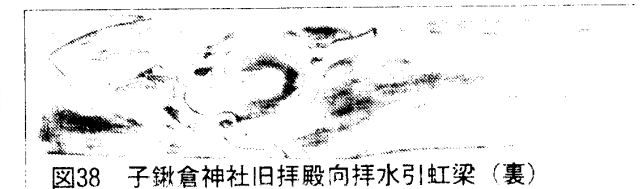


図38 子楯倉神社旧拜殿向拝水引虹梁 (裏)



図33 飯豊神社拜殿向拝水引虹梁 (裏)



図39 子楯倉神社本殿向拝水引虹梁 (表)

第1の渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、上から下って巻き下がり、先の腰に小若葉が付いている。第2の渦は第1の渦の途中の腰から下に分かれ、巻き上げて先の腰に小若葉を付けている。また第2の渦の途中の腰から上に分かれて若葉が付いている。横田棟梁の作品の中において、渦が巻き下がる例としてはこの絵様が最初のものである。

内外陣境脇間虹梁／上り巻上げ渦・付若葉文
(図36)

渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、下から上って巻き上げ、先の腰から下に分かれて若葉が付いている。全体に若葉化した渦若葉であり、昌源寺本堂大間仏間境虹梁の絵様に類似している。

⑫子鋳倉神社社殿（嘉永6・1853年）
旧拝殿向拝繫虹梁（表）／下り巻上げ渦小若葉・
付渦若葉文（図37）

渦は袖切り部分に屈曲がなく、上から下って巻き上がり、途中の腰および先の腰に小若葉が付いている。渦の途中の腰から上に分かれて渦が付き、さらにその腰から下に分かれて若葉が付いている。二次渦若葉全体が若葉化した蔓若葉となっている。

旧拝殿向拝水引虹梁（裏）／下り巻上げ渦・付
小若葉文（図38）

渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、上から下って巻き上がり、途中の腰から上に分かれて小若葉が付いている。

本殿向拝水引虹梁（表）／下り巻下げ渦小若葉・
付渦若葉文（図39）

第1の渦は袖切り部分に屈曲がなく、上から下って巻き下がり、先の腰から上に分かれて小若葉が付いている。第2の渦は第1の渦の途中の腰から下に分かれて付き、さらにその途中の腰から上に分かれて若葉が付いている。二次渦若葉全体が若葉化した蔓若葉となっている。飯豊神社内外陣境中央間虹梁の絵様に類似している。

本殿向拝水引虹梁（裏）／下り巻上げ渦文
(図40)

渦は袖切り部分に屈曲がなく、上から下って巻き上げた単純なものとなっている。

本殿海老虹梁（向拝柱側）／上り巻上げ渦・付
若葉文（図41）

渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、下から上って巻き上げ、先の腰から下に分かれて若葉が付いている。全体として若葉化した蔓若葉となっている。

本殿海老虹梁（身舎柱側）／下り巻上げ渦若葉・
上り巻上げ渦文（図41）

上から下って巻き上げる渦若葉と下から上って巻き上げる渦が接している。

本殿妻虹梁／上り巻上げ渦若葉・付渦若葉文
(図42)

下から上って巻き上げる渦若葉に、途中の腰から上に分かれて渦若葉が付いている。この絵様はこれまでにない新しい意匠である。

⑬満福寺鐘楼（万延2・1861年）／虹梁絵様の資料なし。

⑭駒形神社本殿（明治6・1873年）／虹梁絵様の資料なし。

3) 第3期：単純渦若葉文型および複雑唐草文型

⑮鹿島神社社殿（明治15・1882年）
拝殿向拝水引虹梁／下り巻上げ渦若葉・付渦・
付渦若葉文（図43）

第1の渦は袖切り部分に2カ所の屈曲をもち、上から下って巻き上がり、先の腰から上に分かれて若葉が付いている。第2の渦は第1の渦の途中の腰から上に分かれて付き、その先の腰から第3の渦が下に分かれて、さらに先に若葉が付いている。渦は最初の分かれ目から雲状に変化し、渦目は雲形になっている。3次の渦が構成されたのはこの例が最初である。

拝殿海老虹梁（身舎柱側）／上り巻上げ渦・付
渦若葉文（図44）

第1の渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、下から上って巻き上がり、その肩から上に第2の渦が巻き上がり、さらにその途中の

肩から上に分かれて若葉が付いている。

拝殿海老虹梁（向拝柱側）／下り巻上げ渦若葉・付渦若葉文（図44）

第1の渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、上から下って巻き上がり、先の腰から下に分かれて若葉が付いている。第2の渦は第1の渦の途中の腰から上に分かれて付き、さらにその先の腰から下に分かれて若葉が付いている。

⑩五斗蒔延命地藏堂（明治22・1889年）

向拝水引虹梁（表）／上り巻上げ渦雲絡み・付若葉文（図45）

渦は袖切り部分に1カ所の屈曲がつき、下から上って巻き上げ、途中の腰から雲が絡んでいる。渦の先の腰から横に分かれて若葉が付いている。水引虹梁裏の絵様は、下り巻上げ渦文となっている。

繫虹梁／下り巻上げ白渦・付若葉文（図46）

渦は先端に目のない白渦であり、袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、上から下って巻き上げている。渦の腰から上に分かれて若葉が付く、その分かれ目に小若葉・小渦目が付いている。

⑪剛叟寺本堂（明治22・1889年）

向拝水引虹梁（表）／上り巻上げ渦・付若葉文（図47）

渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、下から上って巻き上げ、肩に小若葉が付いている。渦の先の腰から下に分かれて若葉が付いている。全体に若葉化されている。

向拝水引虹梁（裏）／上り巻上げ若葉文（図48）

袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、下から上って巻き上げた若葉となっている。

内外陣境脇間虹梁／下り巻下げ枝菊形渦・付枝菊形若葉文（図49）

枝菊が上から下って巻き下がって菊花を巻き込む。その腰から下に分かれて枝菊が付く、菊花まで渦様に巻き上がり、さらに枝菊が付いて伸びている。

来迎柱間虹梁／上り巻上げ渦・付白渦若葉文（図50）

渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、下から上って巻き上げ、途中の肩に小若葉・小渦目、先の肩に小若葉が付いている。渦の先の腰から下に分かれて白渦が付く、さらにその腰から上に若葉が付いている。渦と白渦および白渦と若葉の分かれ目には小渦目が付いている。

⑫宇佐八幡神社拝殿（明治23・1890年）

向拝水引虹梁／枝菊形唐草文（図51）

向拝繫虹梁／上り巻上げ渦・付白渦若葉文（図52）

渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、下から上って巻き上げ、途中の肩に小若葉・小渦目、先の肩に小若葉が付いている。渦の先の腰から下に分かれて白渦が付く、さらにその腰から上に若葉が付いている。渦と白渦および白渦と若葉の分かれ目には小渦目が付いている。剛叟寺本堂来迎柱間虹梁の絵様に類似している。

⑬熊倉神社社殿（明治25・1892年）

拝殿水引虹梁（表）／上り巻上げ渦・付白渦・付若葉文（図53）

渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、下から上って巻き上がり、肩に小若葉が付いている。渦の先の腰から下に分かれて小若葉付の白渦が付く、さらにその先の腰から上に若葉が付いている。全体が若葉化した蔓若葉となっている。

拝殿水引虹梁（裏）／上り巻上げ渦・付白渦・付若葉文（図54）

表の絵様とほぼ同じ。

拝殿二重虹梁／下り巻上げ渦若葉・付渦・付渦若葉文（図55）

第1の渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、上から下って巻き上がり、先の腰から下に分かれて若葉が付いている。第2の渦は第1の渦の途中の腰から上に分かれて巻き上がり、その先の腰から下に分かれて第3の渦が巻き上がり、さらにその先の肩から若葉が分かれて付いている。3次の渦が構成され、鹿島神社向拝水引虹梁の絵様に類似している。



図40 子楯倉神社本殿水引虹梁 (裏)



図47 剛叟寺本堂向拝水引虹梁 (表)



図41 子楯倉神社本殿海老虹梁



図48 剛叟寺本堂向拝水引虹梁 (裏)



図42 子楯倉神社本殿妻虹梁



図49 剛叟寺本堂内外陣境脇間虹梁



図43 鹿島神社拝殿向拝水引虹梁



図50 剛叟寺本堂来迎柱間虹梁



図44 鹿島神社拝殿海老虹梁



図51 宇佐八幡神社拝殿向拝水引虹梁



図45 五斗蒔延命地藏堂向拝水引虹梁 (表)

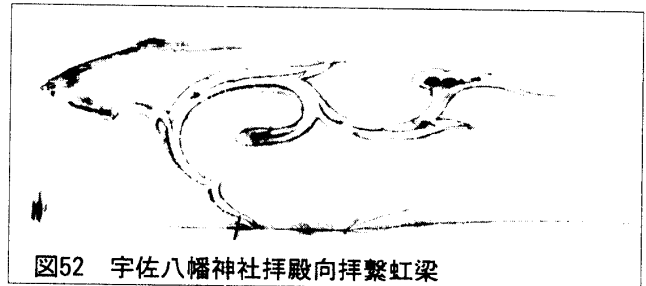


図52 宇佐八幡神社拝殿向拝繫虹梁

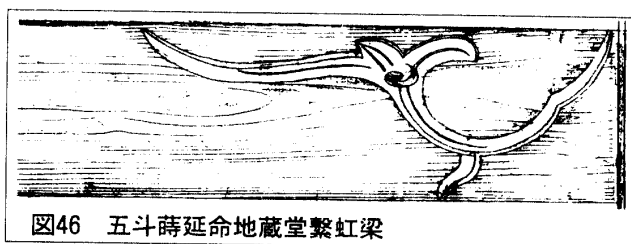


図46 五斗蒔延命地藏堂繫虹梁



図53 熊倉神社水引虹梁 (表)



図54 熊倉神社拝殿向拝水引虹梁（裏）



図55 熊倉神社拝殿向拝二重虹梁（表）



図56 熊倉神社拝殿繫虹梁（外）



図57 熊倉神社拝殿繫虹梁（内）



図58 古峯神社拝殿向拝水引虹梁（表）

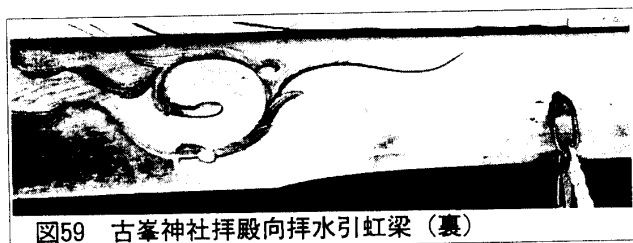


図59 古峯神社拝殿向拝水引虹梁（裏）



図60 古峯神社拝殿正面中央間虹梁（表）



図61 郎山神社本殿向拝水引虹梁

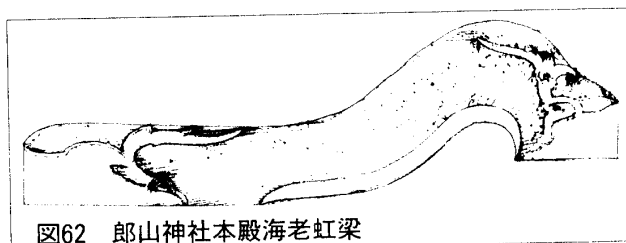


図62 郎山神社本殿海老虹梁

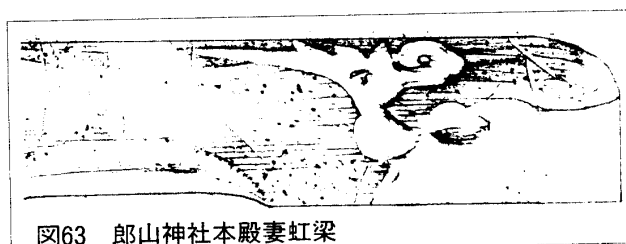


図63 郎山神社本殿妻虹梁

拝殿繫虹梁（外）／上り巻上げ渦・付若葉文
（図56）

渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、下から上って巻き上がり、肩に小若葉が付いている。渦の先の腰から下に分かれて若葉が付いている。いわゆる渦若葉である。

拝殿繫虹梁（内）／上り巻上げ渦・付若葉文
（図57）

外の絵様とほぼ同じ。

⑳古峰神社拝殿（明治31・1898年）

向拝水引虹梁（表）／枝菊形唐草文（図58）

向拝水引虹梁（裏）／下り巻上げ渦若葉・付若葉文
（図59）

渦は袖切り部分で1カ所の屈曲をもち、上から下って巻き上がり、先の肩に小若葉、腰に若葉を付けている。渦の途中の腰から上に分かれて若葉が付いている。

正面中央間虹梁／上り巻上げ白渦・付若葉・付若葉文
（図60）

渦は袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、下から上って巻き上げ、途中の肩に小若葉・小渦目、先の肩に小若葉が付いている。渦の先の腰から下に分かれて白渦が付き、さらにそ

の腰から上に若葉が付いている。渦と白渦および白渦と若葉の分かれ目には小渦目が付いている。宇佐八幡神社拝殿向拝繫虹梁の絵様に類似している。

①普賢寺本堂（明治33・1900年）／絵様の資料無し。

②郎山神社本殿（明治37・1904年）
向拝水引虹梁／下り巻上げ若葉・付渦・付若葉文（図61）

袖切り部分に1カ所の屈曲をもち、上から下って巻き上げた若葉に、その肩から上に分かれて渦が巻き下がり、さらにその肩から上に分かれて若葉が付いている。

海老虹梁（向拝柱側）／上り巻上げ若葉文（図62）

海老虹梁（身舎柱側）／上り巻上げ渦・付白渦・付若葉文（図62）

妻虹梁／下り巻上げ雲・付若葉文（図63）

横田氏の建築遺構の絵様を通観すれば、次のように分類することができる。

- イ. 渦の巻き方：（下り巻上げ，上り巻上げ，下り巻下げ）
- ロ. 渦の形態：（渦，白渦，木瓜渦，若葉形渦）
- ハ. 渦と若葉の関係：（放れる，付く）
- ニ. 若葉の形態：（若葉，蔓若葉）
- ホ. 疑似渦若葉：（枝菊，流水雲，流水波，複合形）

たとえば絵様の様式を表現しようとするれば、上記の各分類項目の組み合わせによって表現することになる。

また絵様の変遷を大きく捉えると次のことが指摘される。

- イ. 放れ若葉から付き若葉へ変化する。
 - ロ. 単純な渦から若葉化した渦へ変化する。
 - ハ. 一次渦から二次渦，三次渦へと複雑化する。
- 付若葉の初見は、文政2（1819）年に建築された蛸沢稲荷神社本殿妻虹梁である。このときすでに全体が蔓若葉化している。それ以後、放れ若葉はみられなくなる。

天保年間の遺構をみると、龍穩院本堂（天保

2・1831年）の玄関水引虹梁には、波・雲・菊などが複合されてデザインされている。正学院浮金観音堂（天保5・1834年）向拝水引虹梁（表）には雲が、また身舎正面中央間虹梁（表）には菖蒲の花が散らされていたりして、デザインに特徴がみられる時期である。

二次渦の初見は龍穩院本堂の玄関水引虹梁である。三次渦が現れたのは第3期からであり、初見は鹿島神社拝殿（明治15・1882年）向拝水引虹梁、その他に熊倉神社拝殿（明治21・1888年）向拝二重虹梁、古峰神社拝殿（明治31・1989年）向拝二重虹梁にみられる。

また彫刻的装飾が急激に増えてきたのは文政年間からであり、この時期から彫物師が本格的に横田氏の建築活動に参加してきたことが窺われる。しかしながら彫物師が横田氏の建築活動に参加したことが記録の上から確認できるのは、明治23（1890）年に建築された宇佐八幡神社拝殿であり、その時の彫物師は安達郡大平村の渡辺文治源高忠であった。また彼は古峰神社拝殿の彫刻も手がけている⁴¹。

ところで横田氏が建築した作品をみると、興味深い現象がみられる。それは前の作品の虹梁の絵様に類似した絵様を次の作品に韻を踏むように用いていることである。その上で意匠的に新しい試みを必ず行っている。明治期以降の建築作品に目新しさがみられないのと対照的であるといえよう。

4. 横田家大工文書にみる虹梁絵様

横田氏の建築遺構に見る虹梁絵様を参考にし、また描かれた年代が明確な絵様を基準にして、横田家大工文書における虹梁絵様の変遷を試みることにする。

まず描かれた年代が判明している虹梁絵様は、次のようなものがある。

①広沢山宝蔵寺客殿（天明2・1782年）

5 正面中間虹梁絵様

②湯沢神社（三渡明神）本殿（寛政9・1797年）
496 水引虹梁絵様（2枚）

③秋田山龍穩院本堂（天保2・1831年）

173 玄関脇虹梁絵様

174 内陣脇虹梁絵様

④大徳山地蔵院本堂（天保11・1840年）

16 正面中央間虹梁絵様

来迎柱間虹梁絵様

⑤舟生山昌源寺本堂（嘉永2・1849年）

44 外陣脇虹梁絵様

45 外陣・内陣中間虹梁絵様

⑥飯豊神社（愛宕堂）拜殿（嘉永4・1851年）

185 内外陣境中央間虹梁絵様

187 内外陣境脇虹梁絵様

⑦子鋤倉神社本殿（嘉永4・1851年）

209 虹梁絵様

⑧駒形神社本殿（明治6・1873年）

219 水引虹梁絵様

222 海老虹梁絵様

⑨五斗蒔延命地蔵堂（明治22・1889年）

170 虹梁絵様

⑩宇佐八幡神社拜殿（明治23・1890年）

260 向拝繫虹梁絵様

横田家大工文書における虹梁絵様の変遷をみると、次の3期に分けることができ、各期の特徴は以下のようなものである。

1) 第1期（寛保2・1819年～文政元・1818年）／渦と若葉が放れている時代

渦と若葉のパターン例は次のようになる。

イ. 下り巻上げ渦：2例（図64, 図65）

ロ. 下り巻上げ渦・放若葉：1例（図72）

ハ. 下り巻上げ木瓜渦：3例（図66, 図67, 図68）

ニ. 下り巻上げ木瓜渦・放若葉：8例（図73, 図74, 図75, 図76, 図77, 図78, 図79, 図80）

ホ. 上り巻上げ渦：3例（図69, 図70, 図71）

ヘ. 上り巻上げ渦・放若葉：4例（図81, 図82, 図83, 図84）

第1期で最も多いパターンは「下り巻上げ木瓜渦・放若葉」で8例みられ、渦は概して「上

〔図註〕（ ）内の数字は横田家文書目録番号であり、以下同様

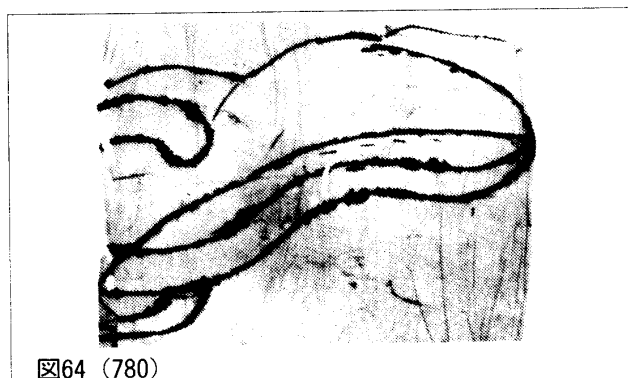


図64 (780)

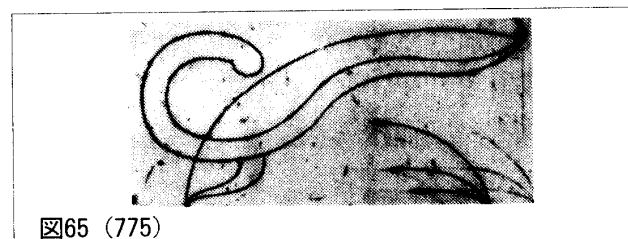


図65 (775)

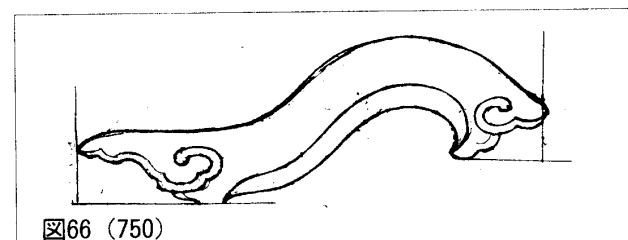


図66 (750)

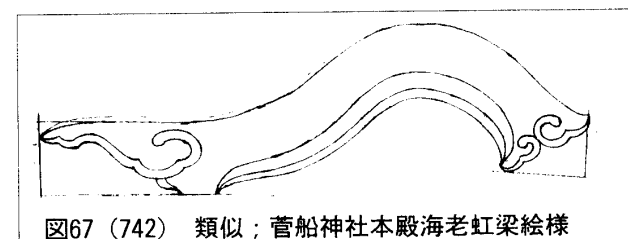


図67 (742) 類似；菅船神社本殿海老虹梁絵様

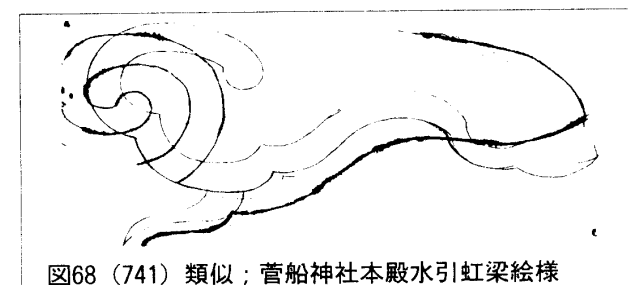


図68 (741) 類似；菅船神社本殿水引虹梁絵様

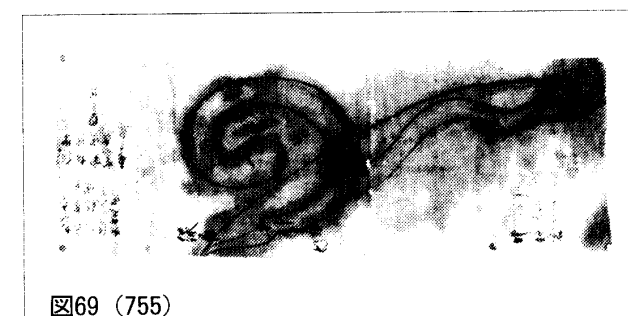


図69 (755)

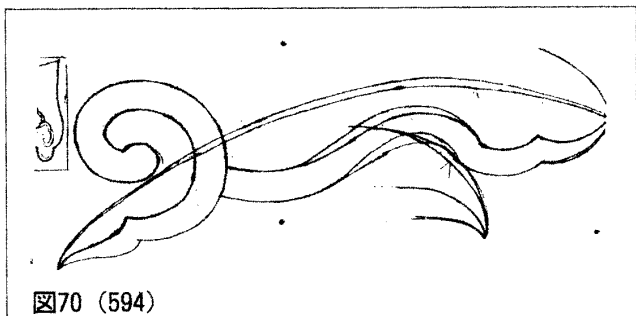


図70 (594)

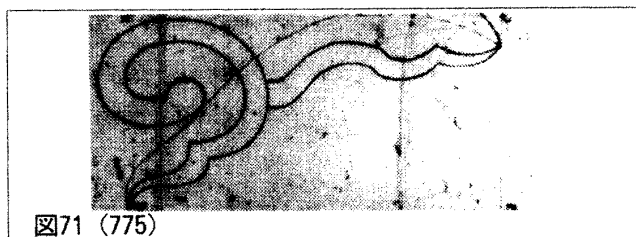


図71 (775)



図72 (579) 類似；宝蔵寺客殿来迎柱間虹梁絵様

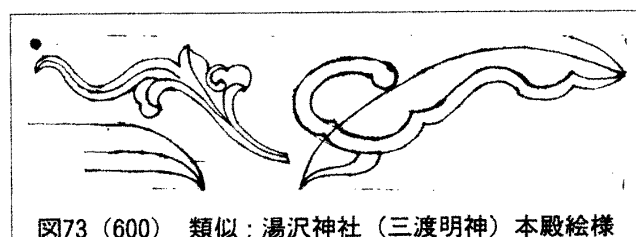


図73 (600) 類似；湯沢神社（三渡明神）本殿絵様

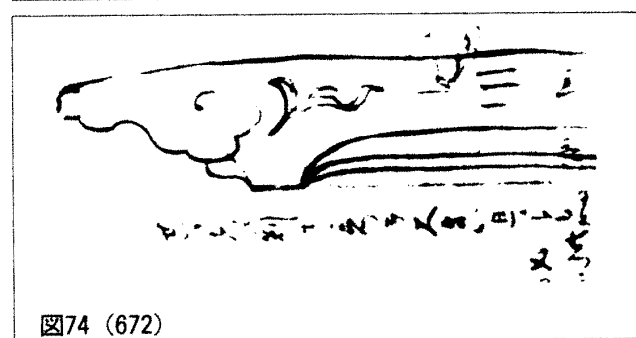


図74 (672)

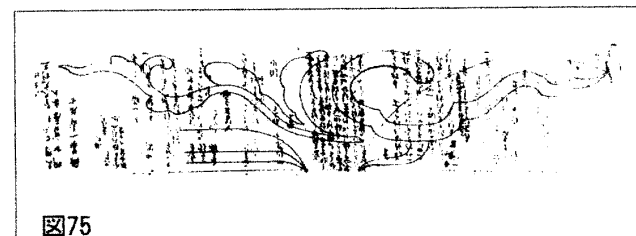


図75



図76 (496) 湯沢神社本殿絵様



図77 (635) 類似；湯沢神社本殿絵様



図78 (543) 類似；菅谷神社本殿向拝水引虹梁絵様



図79 (631) 類似；宝蔵寺客殿来迎柱間虹梁

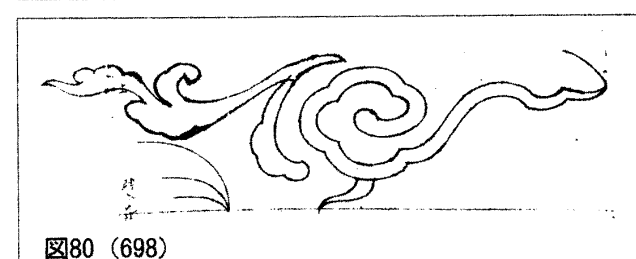


図80 (698)



図81 (538) 類似；菅船神社本殿妻虹梁絵様

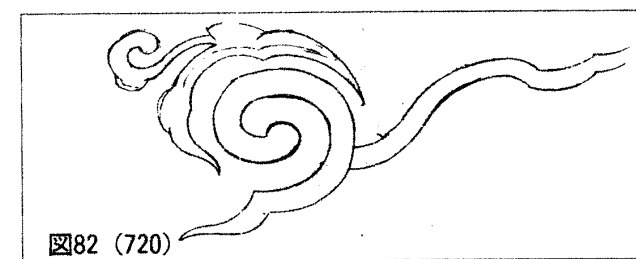


図82 (720)

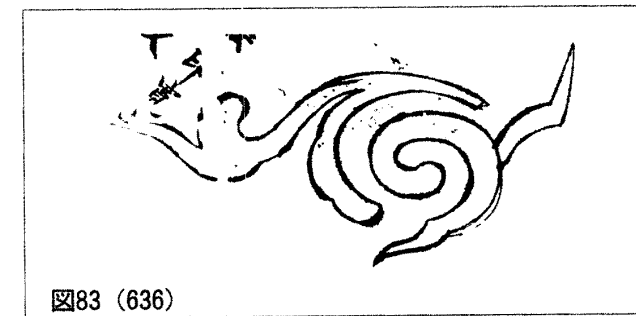


図83 (636)



図84 (580) 類似；湯沢神社本殿絵様



図85 (5) 宝蔵寺客殿虹梁絵様

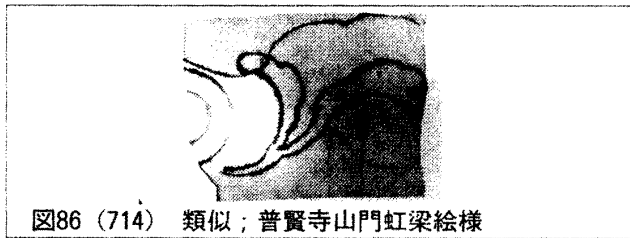


図86 (714) 類似；普賢寺山門虹梁絵様

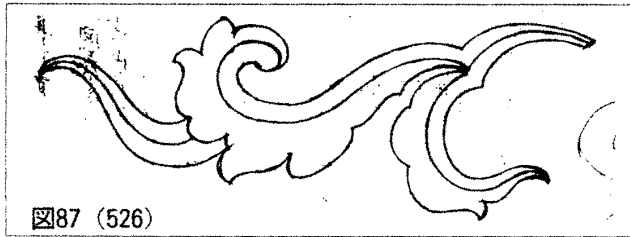


図87 (526)

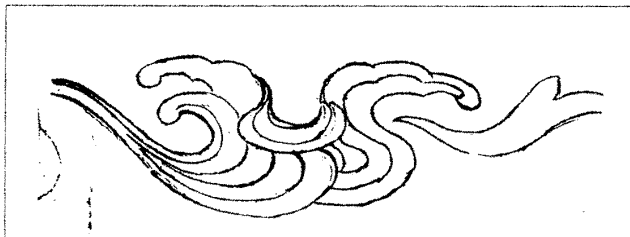


図88 (530) 宝蔵寺客殿正面中間虹梁絵様

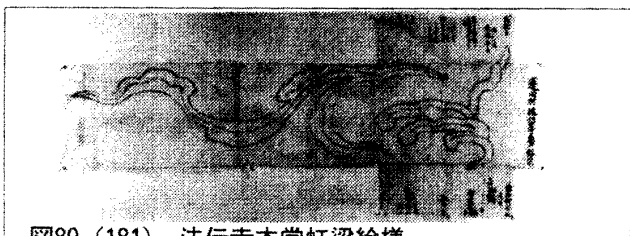


図89 (181) 法伝寺本堂虹梁絵様



図90 (596)

り「下り巻上げ渦」型より「下り巻上げ渦」型の方が多くみられる。またこの時期の絵様で特徴を示すために注目されるのは、若葉の形態である。すなわち葉元が2葉・3葉・4葉に分かれ、さらにその中の1葉を長くのばし、さらに葉分かれさせるものもみられ、若葉の形態を微妙に変えていることがわかる。

ところで若葉の代わりに流水波のものが1例あった(図88)が、これは遺構例から宝蔵寺本堂(天明2・1782年)正面中央間虹梁の絵様であることが判明した。

2) 第2期(文政2・1819年～明治元・1868年) / 渦と若葉が付いている時代。(ただし一部に雲に疑似化した絵様が見られる。)

渦と若葉のパターン例は次のようになる。

- イ. 下り巻上げ渦・付渦(若葉化)・付渦(若葉化)・付若葉: 1例(図102)
- ロ. 下り巻上げ渦若葉・付若葉: 2例(図99, 図112)
- ハ. 下り巻上げ渦若葉・付渦(若葉化)・付若葉: 5例(図92, 図113, 図114, 図115, 図116)
- ニ. 下り巻上げ渦若葉・付渦若葉・付若葉: 1例(図117)
- ホ. 下り巻上げ渦若葉・付渦(若葉化)・付渦(若葉化)・付若葉: 2例(図100, 図101)
- ヘ. 下り巻上げ渦二次渦(若葉化)若葉・付渦(若葉化)付若葉: 2例(図93, 図94)
- ト. 下り巻下げ渦若葉・付渦若葉・付若葉: 2例(図106, 図107)
- チ. 下り巻下げ渦若葉・付渦若葉・付渦(若葉化)・付若葉: 1例(図118)
- リ. 上り巻上げ渦・付若葉: 6例(図96, 図98, 図105, 図108, 図111, 図114)
- ヌ. 上り巻上げ渦・付渦(若葉化)・付若葉: 2例(図95, 図109)
- ル. 上り巻上げ渦・付渦若葉・付若葉: 1例

(図110)

ヲ. 上り巻上げ渦・付渦 (若葉化)・付渦
(若葉化)・付渦 (若葉化)・付若葉:
1例 (図103)

その他特殊な絵様／

ワ. 雲絡み下り巻上げ渦・付若葉: 蛭沢稻荷
神社本殿妻虹梁絵様 (図91)

カ. 雲絡み下り巻上げ渦若葉・付渦若葉: 昌
源寺本堂虹梁絵様 (図104)

コ. 雲形上り巻上げ渦・付渦若葉: 正学院浮
金観音堂向拝水引虹梁絵様 (図97)

第2期で最も多いパターンは「上り巻上げ渦・
付若葉」で6例あり, 次に「下り巻き上げ渦若
葉・付渦 (若葉化)・付若葉」で5例ある. 第
1期は「下り巻上げ渦」型が圧倒的に多数であっ
たが, 第2期では「下り巻上げ渦」型と「上り



図95 (174) 龍隠院本堂虹梁絵様

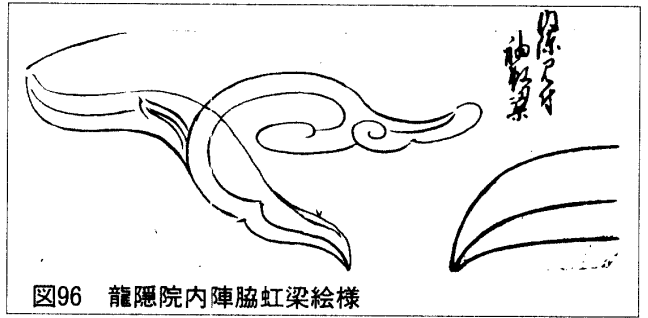


図96 龍隠院内陣脇虹梁絵様



図91 蛭沢稻荷神社本殿妻虹梁絵様



図97 類似; 正学院浮金観音堂向拝水引虹梁絵様

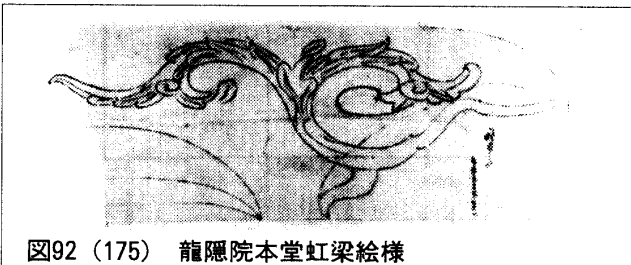


図92 (175) 龍隠院本堂虹梁絵様



図98 船引村地藏院本堂来迎柱間虹梁絵様



図93 (173) 龍隠院玄関脇虹梁絵様

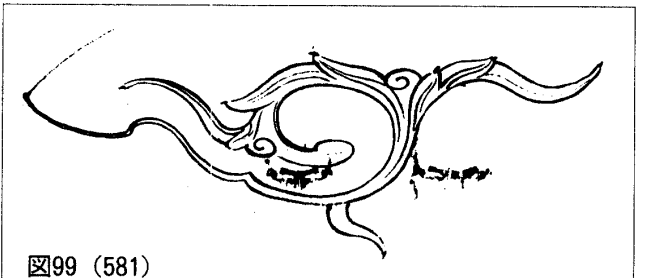


図99 (581)

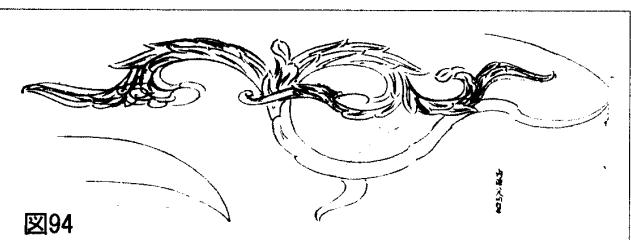


図94

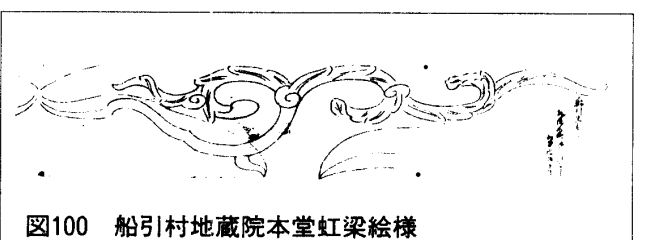


図100 船引村地藏院本堂虹梁絵様

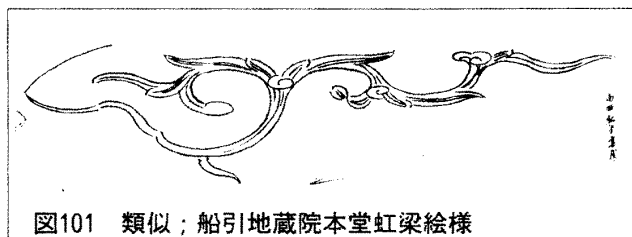


図101 類似；船引地藏院本堂虹梁絵様



図108 (746) 子鍬倉神社 (岩城稻荷宮) 虹梁絵様



図102 (16) 船引地藏院本堂正面中間虹梁絵様



図109 (209) 子鍬倉神社虹梁絵様

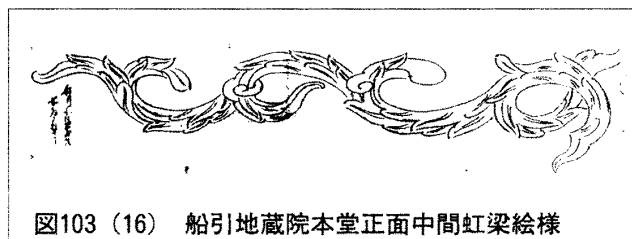


図103 (16) 船引地藏院本堂正面中間虹梁絵様



図110 (610) 類似；子鍬倉神社旧拝殿虹梁絵様



図104 (44) 昌源寺本堂虹梁絵様

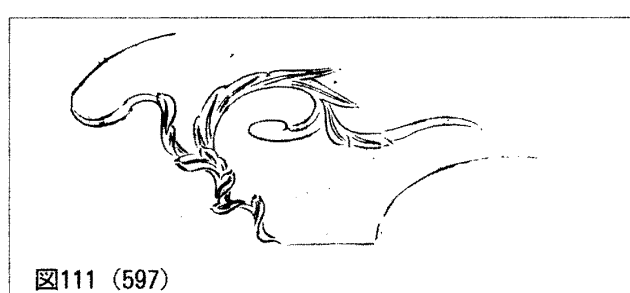


図111 (597)

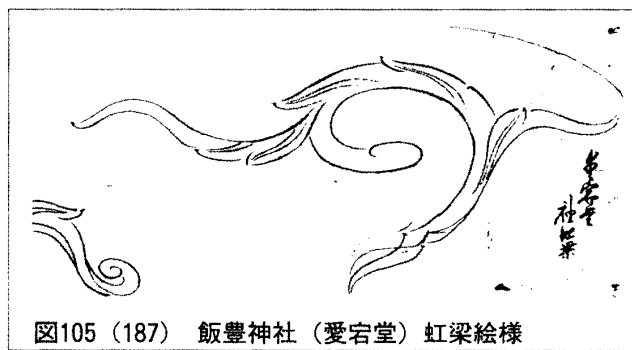


図105 (187) 飯豊神社 (愛宕堂) 虹梁絵様



図112 (611) 子鍬倉神社旧拝殿向拝水引虹梁 (裏面) 絵様



図106 (185) 飯豊神社拝殿内外陣境中間正面虹梁絵様

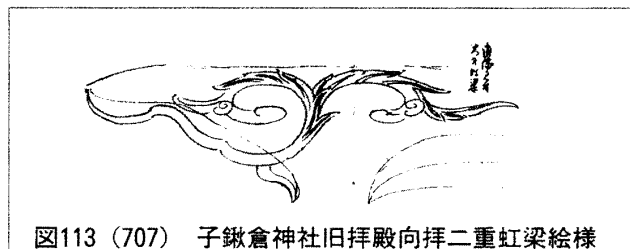


図113 (707) 子鍬倉神社旧拝殿向拝二重虹梁絵様



図107 類似；飯豊神社拝殿内外陣境中間正面虹梁絵様

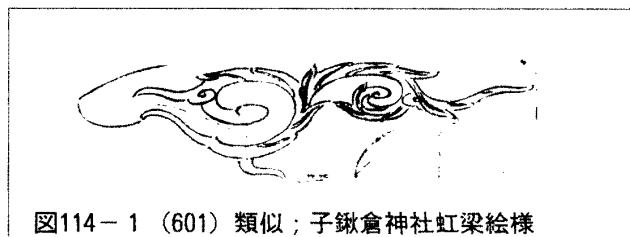


図114-1 (601) 類似；子鍬倉神社虹梁絵様



図114-2 (601) 類似；子鍬倉神社虹梁絵様



図115 類似；子鍬倉神社旧拝殿向拝二重虹梁絵様



図116 類似；子鍬倉神社旧拝殿向拝虹梁絵様



図117 (611) 類似；子鍬倉神社旧拝殿向拝水引虹梁(表面)絵様

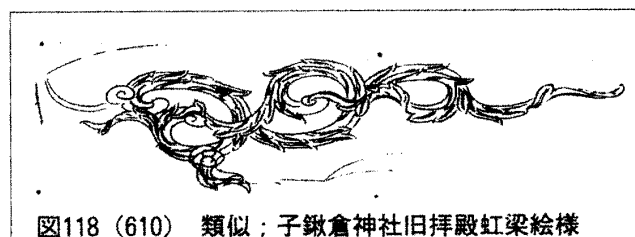


図118 (610) 類似；子鍬倉神社旧拝殿虹梁絵様

「巻上げ渦」型はほぼ同数みられるようになる。

この時期の絵様の特徴は渦の巻き方に多様性があり、全体として若葉化がかなり進み、蔓若葉の様態になっているといえよう。

3) 第3期(明治2・1869年～明治41・1908年)／比較的単純な渦若葉文および複雑化した唐草文の時代

渦と若葉のパターン例は次のようになる。

- イ. 下り巻上げ渦：1例(図121-2)
- ロ. 下り巻上げ渦・付若葉：4例(図120-2, 図121-1, 図122-1, 図122-2)
- ハ. 上り巻上げ渦：1例(図126)
- ニ. 上り巻上げ若葉：2例(図119, 図120-1)
- ホ. 上り巻上げ渦・付若葉：4例(図123, 図125, 図127, 図128)
- ヘ. 上り巻上げ渦・付渦(若葉化)・付若葉：3例(図124, 図129, 図130)

その他特殊なもの／

- ト. 波形下り巻上げ渦若葉・付渦・付渦若葉(図131)
- チ. 下り巻上げ菊葉形渦(図132)
- リ. 上り巻上げ渦・下り巻上げ渦若葉(図133)
- ヌ. 菊葉花形下り巻上げ渦若葉・付渦・付渦・付若葉(図134)
- ル. 雲絡み下り巻上げ渦・付渦・付若葉(図135)
- ヲ. 菊枝葉花形下り巻上げ渦・付渦・付若葉(図136)
- ワ. 流水波菊葉花形下り巻上げ渦若葉・付若葉(図137)
- カ. 流水波菊葉花形下り巻上げ渦若葉・付渦・付渦若葉(図138, 図139, 図140)

この期の特徴は比較的単純な「上がり巻上げ渦」型の絵様が多くなった。その他は特殊な複雑な彫りが要求される絵様が多くなってきたが、これは虹梁絵様が彫物師によって掘られるようになったためであろう。

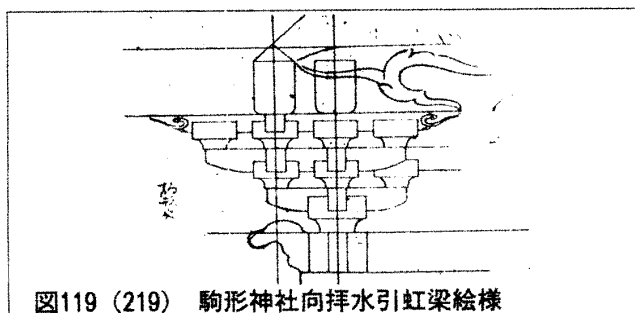


図119 (219) 駒形神社向拝水引虹梁絵様

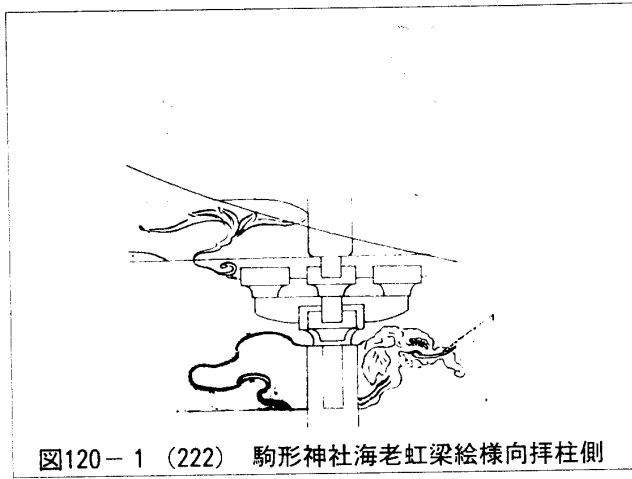


図120-1 (222) 駒形神社海老虹梁絵様向拝柱側

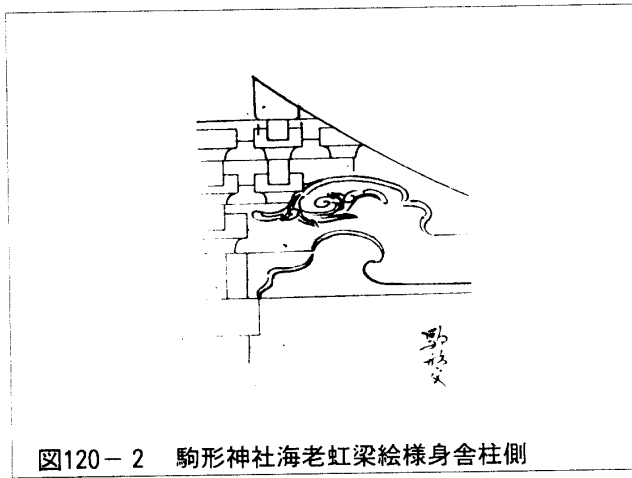


図120-2 駒形神社海老虹梁絵様身舎柱側

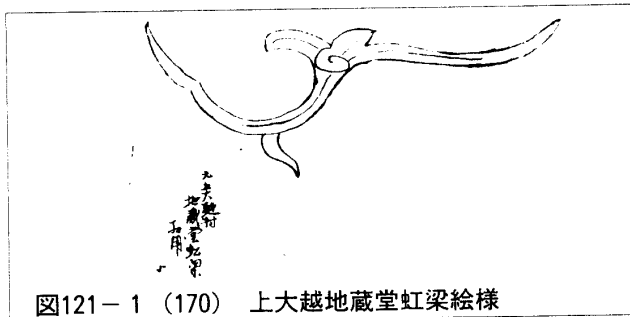


図121-1 (170) 上大越地蔵堂虹梁絵様

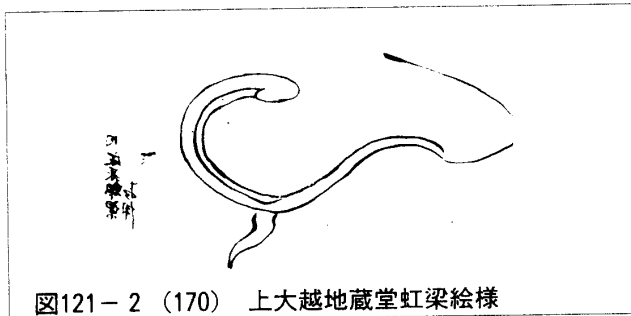


図121-2 (170) 上大越地蔵堂虹梁絵様

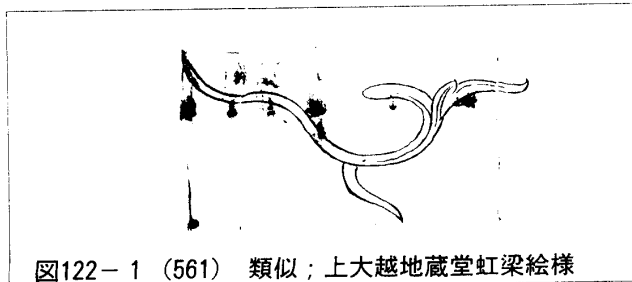


図122-1 (561) 類似；上大越地蔵堂虹梁絵様

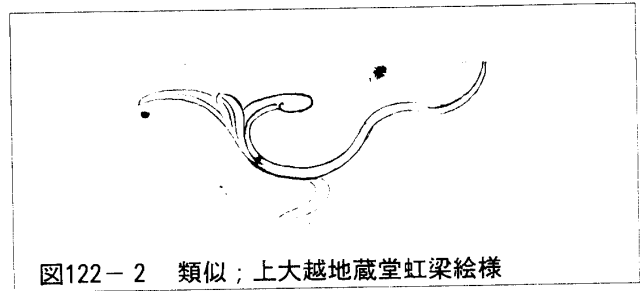


図122-2 類似；上大越地蔵堂虹梁絵様

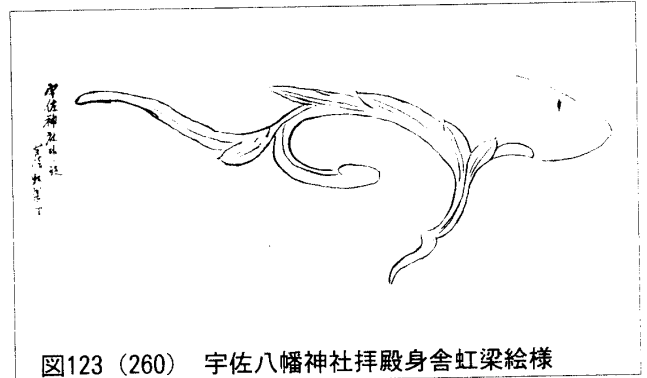


図123 (260) 宇佐八幡神社身舎虹梁絵様



図124 (261) 宇佐八幡神社向拝繫虹梁(裏面)絵様

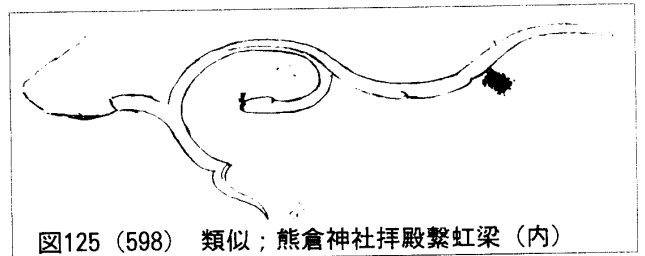


図125 (598) 類似；熊倉神社向拝繫虹梁(内)

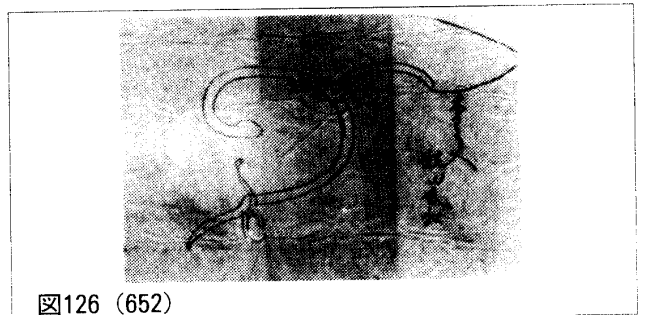


図126 (652)

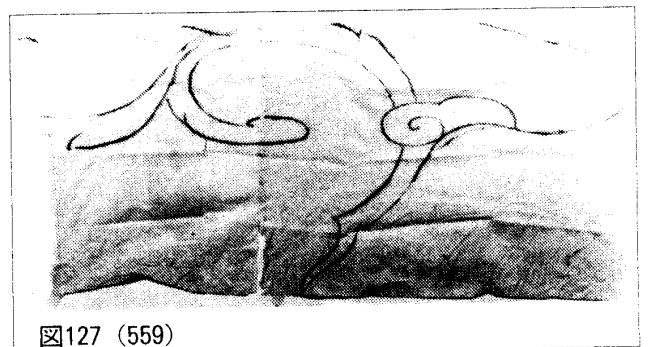


図127 (559)

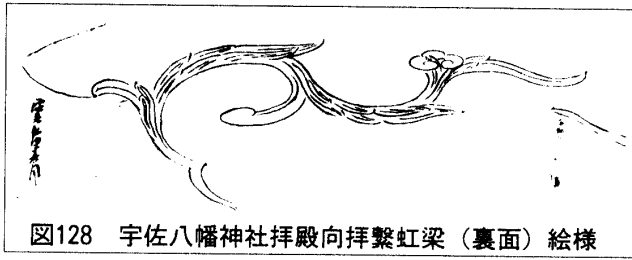


図128 宇佐八幡神社拝殿向拝繋虹梁（裏面）絵様

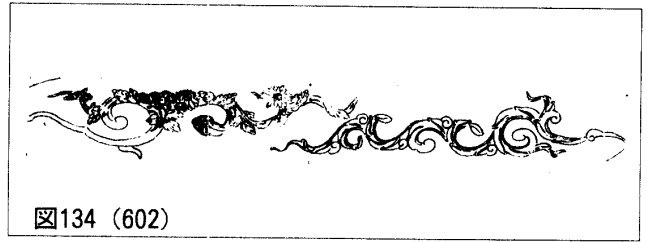


図134 (602)



図129 宇佐八幡神社拝殿向拝繋虹梁絵様

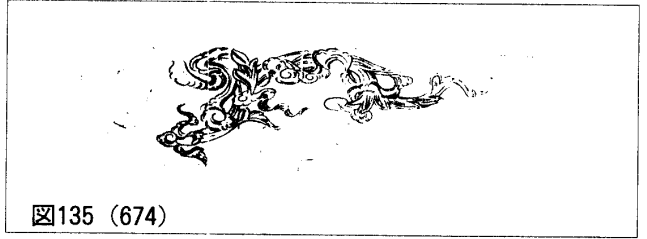


図135 (674)



図130 (649) 宇佐八幡神社拝殿向拝繋虹梁（裏面）絵様



図136 (136)

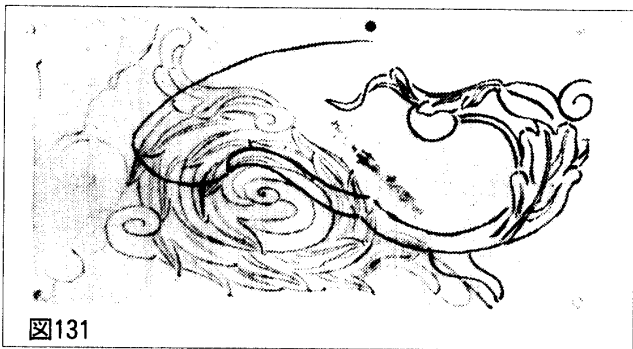


図131



図137 (715)

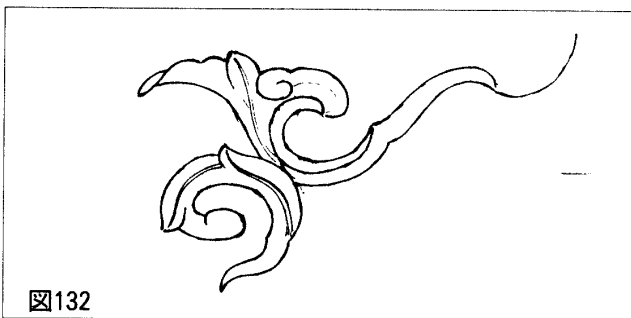


図132

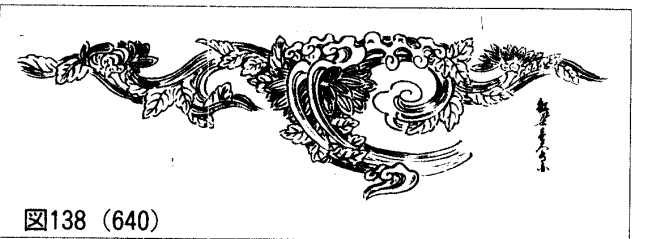


図138 (640)



図133 (734)



図139 (523) 川俣玉泉寺虹梁絵様



図140 (660)

5. 絵様変遷の背景

絵様の変遷を概観すると、渦放若葉から渦付若葉へ変化したこと、渦付若葉が次第に複雑化したこと、流水・波・雲・菊枝葉花・菖蒲などの文様が複合化したことを指摘することができる。この大きな変化がどのような要因によって引き起こされたのか考えてみることにする。

まず渦付若葉が初めて導入されたのは、第2期最初の建築作品である蛭沢稲荷神社本殿妻虹梁（文政2・1819年）が初めてであった。この年は3代目杢左衛門が28才で本格的に建築活動をはじめ、さらに4代目杢左衛門を襲名した広治（14才）は修行に入り、その兄である規義（20才）は修行を終え、彼らが一人前に成長する時期と一致する。

また彫刻臺股が初めて導入されたのは、昌源寺本堂（弘化4・1847年）が初めてであり、このとき5代目杢左衛門が、天保13・1842年13才のときから本宮の松田嘉蔵のもとで6年間修行を積み、その修行を終えて普請に加わっている。

ところで明治維新（1868）から11年（1878）にかけて、横田氏はほとんど仕事がなくなった。慶応4年（1868）に戊辰戦争が勃発し、奥羽列藩同盟の結成により広瀬村にも戦火が及んだ。三春から岩城浜に至る岩城街道は、官軍にとって会津若松へと攻め登る上の重要な街道の一つであり、数万の軍勢が途中戦闘を交えて行軍している⁵⁾。この地域は戦後しばらくかなり混乱したと考えられ、それゆえこの時期に横田氏の建築活動が停滞したのであろう。

また透かし彫木鼻が初めて導入されたのは、第3期の鹿島神社社殿（明治12・1879年）において初めてである。このとき石太郎は19才で、一人前になって普請を再開するようになったことと一致する。しかしながら石太郎は5代目棟梁の元で修行を積んだため、虹梁絵様はこれまでのデザインを踏襲した絵様となったのであろう。石太郎は彫物師の力を借りなければ、かれの建築作品の中に新しい意匠を吹き込むことはできなかったのかもしれない。

このようにみえてくると、横田氏が手がけた建築作品における新しい意匠上の変化は、棟梁家において次世代の棟梁が修行を終え、一人前になっていく時期と一致し、若き棟梁のアイデンティティの表出に絵様が一役買っていたと結論づけることができよう。

また『東京の近世社寺建築』⁶⁾によって江戸の絵様をみると、横田棟梁の絵様の変遷と同様の変化がみられ、かつ時代的にいって、横田棟梁の絵様が江戸のそれより約10年から15年ほど遅れて現出していることが指摘される。したがって江戸を代表する先進地で流行したデザインを、横田氏の修業時代に何らかの方法で学び、それを棟梁の交代期に蜘蛛流の絵様として定着させていったと考えることができよう。

6. 結論

これまでの考察を要約すると以下のようなになる。

- (1) 近世の大工雛形の中の『大和絵様集』によると、虹梁絵様は「渦放若葉」「渦付若葉」「渦付蔓若葉」に分類することができる。
- (2) 横田棟梁の建築遺構および横田家大工文書における虹梁絵様を通観すると、大きく第1期：渦放若葉文型、第2期：渦付若葉文型および渦付蔓若葉文型、第3期：単純渦若葉文型および複雑唐草文型に分けることができる。
- (3) 横田棟梁の虹梁絵様の変遷を概観すると、渦放若葉から渦付若葉へ変化したこと、渦付若葉が次第に複雑化したこと、そして最後に流水・波・雲・菊枝葉花などの文様が複合化した意匠が現れたことなどを指摘することができる。
- (4) 横田棟梁の建築作品における新しい意匠上の変化は、棟梁家において、次世代の棟梁が修行を終え、一人前になっていく時期と一致している。
- (5) 江戸などの先進地で流行したデザインを、棟梁の交代時期に、蜘蛛流の絵様として定着させていったと考えることができる。

註

- 1) 関野克『文化財と建築史』(1969年) 鹿島出版会, 221頁
- 2) 白井裕泰他『滝根町建物調査報告1(滝根町資料集第11集)』(1986年) 滝根町教育委員会
白井裕泰他『滝根町建物調査報告2(滝根町資料集第13集)』(1987年) 滝根町教育委員会
白井裕泰他『滝根町建物調査報告3(滝根町資料集第15集)』(1988年) 滝根町教育委員会
白井裕泰他『滝根町建物調査報告4(滝根町資料集第17集)』(1989年) 滝根町教育委員会
白井裕泰他『滝根町建物調査報告5(滝根町資料集第18集)』(1990年) 滝根町教育委員会
白井裕泰他『滝根町建物調査報告6(滝根町資料集第20集)』(1991年) 滝根町教育委員会

- 白井裕泰他『滝根町建物調査報告7(滝根町資料集第21集)』(1993年) 滝根町教育委員会
- 3) 白井裕泰「横田家大工文書の研究(1)」(1995年) 共栄学園短期大学研究紀要第11号, 177頁
- 4) 白井裕泰他『滝根町建物調査報告3(滝根町資料集第15集)』(1988年) 滝根町教育委員会, 16頁
- 5) 『滝根町史第1巻通史編』(1990年) 滝根町史編集室, 539~541頁
- 6) 『東京都の近世社寺建築』(1989年) 東京都教育委員会

参考文献

- 中村隆宏『横田家大工絵様変遷の研究』(1993年度早稲田大学卒業論文)

SYNOPSIS

Consideration on the Design Style of Beams made
by the Yokota Family, or the Master Builders of the Kumo school

Dr.SHIRAI Hiroyasu

This paper offers an analysis of and a consideration on the design style on the architectural documents and works by the master builders of the Kumo School, chaired by the Yokota Family during the period from late the Edo era to early Meiji.

As a result of our research, we can point out the following findings:

1. We can classify the design styles of beams as three types, "Uzu-hanare-Wakaba (a whirlpool separated from a young leaf)", "Uzu-tsuki-Wakaba (a whirlpool attached to a young leaf)" and "Uzu-tsuki-Tsuru-Wakaba (a young leaf imitating vines)", which are shown on the text of carpenters' documents during the Edo period.
2. We can find the clearly different three periods of the design styles of beams made by the Master Yokota Family. The first period is the time of "Uzu-hanare-Wakaba", the second "Uzu-tsuki-Wakaba and Uzu-tsuki-Tsuru-Wakaba", and the third "Tanjun-Uzu-Wakaba and Fukuzatsu-Karakusa (a complex arabesque pattern)".
3. Outlining the changes of design styles of beams by the Yokota, it is found that they changed from Uzu-hanare-Wakaba to Uzu-tsuki-Wakaba, that Uzu-tsuki-wakaba became complicated gradually, and that the mixture of the design styles of the flowing water, the waves, the clouds and the leaves of chrysanthemums emerged.
4. It is also found that the time of these new designs emerging is consistent with that when younger generation of the Yokota had been trained and grown up as a carpenter.
5. We can make sense that, during the turns of new and old carpenters, as their own design the Yokota family seemed to adopt the design which had dominated in urban area such as the city of Edo.